自然観察指導員講習会

一、講習会をふりかえる

進藤　勉

いろいろなかたがたに期待され、待望された講習会がようやく八月八日（土）～十日（月）の三日間にわたって開催された。

最近、道内においても自然志向の風潮を受け、自然観察会やそれに類する催しがそちこちで開かれている。また、野生生物への関心も非常に高まり、それを求めて観察活動をする人達もふえ、一種のブームになってきている。しかし、一方ではそれらに対応する指導者の必要性が注目されるようになった。

それらのニーズに対処し(財)日本自然保護協会においてはすでに昭和五十三年頃から「自然観察指導員資格検定制度」を設け、社会的に信頼され有効に社会に活用されうる指導員を養成する講習会を、各県ごとに開催しているので、本道においても実施してほしいという声が出始めるにいたった。

本会の八木健三会長も昨年、新会長に就任するや、その第一声の中で「本道においても是非実施し、多数の優秀なる指導者を養成し、地域のリーダーとさせたい」と申され、開催の手段、方法について検討してきたのである。

＜開催の場所＞

七〇～八〇人の宿泊が可能で、自然に恵まれ、講習会にふさわしい箇所とし、「道立青少年の森」にある「道新羊蹄自然の家（宿泊定数八〇名）」―虻田郡真狩村字社を舞台としてえらぶことにした。

＜時期＞

学校の教員が参加しやすい夏休みの八月をえらび、一般の人も参加しやすい土・日曜をえらび、八月八～十日とした。はじめは七月三十一日～八月二日を予定したのだが、道新の行事と重複したので延期を余儀なくされた。

＜後援者＞

この主旨のご理解を得、北海道、北海道教育委員会、真狩村の後援をえることができたことは、ますますその重要性を強く認識するとともに、力強いことであった。

＜打ち合せ＞

四月二十九日の祝日を利用し、来道した日本自然保護協会の工藤父母道氏、講師予定者の八木会長、宗像英雄理事、北海道生活環境部の梅木賢俊氏、後志支庁、真狩村役場の方がた、自然の家所長、私及び事務局の島田明英氏とで現地打合せをし、講習会の進め方や実地研修のフイルドの選定などをし、講習会開催へとさらに一歩前進した。

＜募集＞

五月末日、日本自然保護協会より募集要領の印刷物が届けられたので、早速、道、道教委、報導機関などを通して募集を開始したが、前評判どおり、一カ月をえずして六月末日にはすでに定員（本道五十五名、東京五名）を突破し、七月を待たずに締切らざるをえなくなった。もちろん五十五名で締切るに忍びなく、宿泊施設を考慮し、六十九名としたが、東京での決定者を加えて七十七名となった。内訳をみると、最高年令五十六才、女子十二名、公務員二十名、教員二十名（うち女子二）、一般二十名（うち女子四）、学生十七（うち女子六）。

＜受講者六十三名＞

しかし、開催数日前に本道を襲った水害のため、全道至るところで、鉄道は寸断され、開催が危ぶまれたが、全道のみならず東京での募集もあり、宿舎関係としても延期がゆるされない。「どうしてもやるのですか？」、「行きたくても行きようがありません！」などとそちこちから電話がくる。

何人参加してもらえるだろうかと心配した開講式に、やはり水害の故に不参加となったものは十四名に達し、受講生は六十三名となった。内訳は、公務員十六名、教員十八名（うち女子二）、一般十三名（うち女子二）、学生十六名（うち女子五）。本道関係は六十名であった。

＜おわりに＞

三日間、早朝の六時から夜は十時までの猛勉強と猛実習であったが、一名の落伍者もでず、全員無事「自然観察指導員」になり、各地域でのリーダーを期待されながら閉講式となった。

なお、閉講に先立ち本道在住の六十名をもって「北海道自然観察指導員連絡協議会」

をつくることになり、各支庁管内（釧路と根室は一とした）にそれぞれ連絡員をおくこととし、（石狩）田中明子、（渡島）羽田登志男、（後志）本間松喜、（空知）四日市　励、（上川）佐藤佳弘、（宗谷）山内　昇、（網走）合地信生、（胆振）市原信男、（日高）中田吉時、（十勝）室瀬秋宏、（釧路根室）三浦二郎の各氏がえらばれ、事務局を本会の中において島田明英氏が担当することになった。

来年（五十七年度）は七月三十一日（土）～八月二日（月）、根室支庁管内の中標津町養老牛で「青年の家」を舞台として開催する予定である。せっかく申し込みながらも定数のために不参加となった方々は、来年こそは早めに申し込みし、ぜひ受講していただきたいと思う。

（事務局長）

二、講習会の内容

島田明英

八月八日（土）

北海道で初めての自然観察指導員講習会は、一三時三〇分の開講式から始まった。地元支庁長はじめ数名のあいさつの後、すぐ野外での実技指導。展示館わきの林で、青柳、金田両講師の指導により二班に分かれて森林での自然観察について学んだ。折り悪しく小雨混じりの天候のため、用意された風力計などの器具を実際に使っての講義はなかったが、森林をまず外からながめ中に入って階層別に見たり落葉をめくったりして細かく観察し、再び外からながめるという方法で森林のしくみや特性について学んだ。この講義では、知識よりも、明るさ、におい、手触りなど五感をフルに働かせ、すなおに「感じる」ということを求められた。従来の種名を覚えることを中心とした自然観察しか知らなかった者にとっては、まったく別の自然の見方、接し方があることを強く印象づけられた講義であった。

約二時間半の講義の後、宿舎となる道新「自然の家」へ移り、入浴、夕食。その後一八時三〇分からは室内での講義。

金田講師の講義は、自然保護についてその定義や目的、歴史などについての幅広いものであった。自然保護という難しいテーマを三時間の講義で完全に理解したとは言い難いが、講師の該博な知識に基づいたわかりやすいお話で、考え方の整理ができたように思う。

講義の後受講者の自己紹介、二二時に一日目の日程が終了した。

八月九日（日）

六時に起床しすぐ玄関前に集合。一時間ほどかけて展示館前まで歩き、野鳥などを観察した。

朝食の後、九時からの野外講義は道内の三名の講師の指導のもとに三班に分かれて行なった。梅木講師は豊富な経験に基づいて野鳥観察の指導についてお話下さったが講義の始まるやアカショウビンが現われ恰好の素材となった。地質の八木先生の講義では、受講者自ら岩石をハンマーで割って観察したり、節理のでき方について興味深いお話をうかがった。植物は宗像講師の担当だった。この方面は受講者の中にも興味を持っている方が多いようで、質問も活発だったが、宗像講師の深い知識には受講者一同舌を巻く思いであった。

昼食後一三時からは再び野外実技指導。二班に分かれ金田、青柳両講師の指導を受けた。この講議では野外観察会で実際にどんなことをするのか、どのようにテーマをみつけていったらよいかについて学んだ。風景描写ゲームや音とりゲームを行なったり、雨の流れた溝から土壌侵食の観察をしたり、草原や森でのテーマの取り上げ方について学ぶ等、実際に野外観察会を指導するうえで参考になった講義であった。

入浴、夕食を済ませ、一八時からは青柳講師の室内での講義。テーマは自然保護教育についてであった。採集して種名を覚えるという方法ではなく、普通にあるものをありのままに見ることが自然保護のための自然観察では重要であるということを強調された。ぎっしり詰まったカリキュラムに少々疲れぎみの受講者も、青柳講師の熱意あふれる講義にい眠りもせず聞きいった。

八月十日（月）

六時三〇分起床。起床後の一時間は九時からの野外指導実習の準備にあてられた。受講者は各自、宿舎周辺を歩きまわってテーマを考えたり、カリキュラム用紙に向かって指導の計画に頭を悩ませた。

朝食後九時からは、この講習会最後の講義、指導実習である。これは一人五分の持ち時間で、自然のしくみや自然と人との係わりについてテーマを決め、受講者が他の受講者を生徒に見たて、実際に野外指導を行なってみるというものである、終了試験ということではないが、講習会の成果を試されるということから受講者全員緊張して臨んだ。受講者の中には普段から野外指導になれて講師顔まけの指導をする方もいたが、大部分の受講者は五分間という時間制限の中で取り上げるテーマが大き過ぎたり

して、ややぎこちないものであった。しかし全員真剣に指導実習を行ない、講師の批評を聞いた。

この後、昼食、まとめのお話のあと閉講あいさつとなり、三日間の講習会を無事終えることができた。

（事務局員）

講習会風景

三、感じたままに

――アカショウビンに教えられ――

中田吉時

「自然観察指導員講習会」第二日目のことである。私達受講者は三班に分かれた。私は一班の先頭を歩いていた。そこは自然観察歩道で、緩やかな下り坂になっていた。勢いがつきそうになるのを靴の踵でおさえながら、去年の落葉をふみしめ坂の中ほどまできたとき、班の誰かが「きれいな鳥がいる」と声をあげた。振返ってその方をみると近くにおられた梅木先生が「アカショウビンですね」といわれ、肩にしておられたプロミナーを降すと、歩道の横によって三脚を手際よく立てられた。ちょっとのぞいて焦点を合わせてから「どうぞ」といわれて、私達に貸して下さった。私達は梅木先生とプロミナーを中心に集まった。私もあわてて上衣のポケットから倍率六倍の双眼鏡をとり出してのぞく。いるいる、鮮かな赤褐色の鳥が一羽、五〇mほど先の茂った広葉樹の中段の枝に、こっちを向いてとまっている。

みんなは押し合うようにしてプロミナーを順にのぞいては、「すばらしい」「うーん」「こっちを向いている」……受講者はみんな大人であり子供ではない。講習会が終って地元に帰ると、いずれも指導員になる人達なのに、すばらしいアカショウビン一羽にすっかり昂奮ぎみである。「おーい、静かにしないと驚いて逃げちゃうぞー」、うしろで順を待っている一人がいった。話すのがぴったりやんだ。いま、飛んでゆかれては大変である。二班、三班の人達はみていない、誰もがそう思っているに相違ない。

私のみる順番がきた。左手の甲で眼をこすってからプロミナーの接眼鏡をのぞくと……いるいる、こっちを向いて、「おじさんよくみてね」といわんげに、美しい、実に美しい。その鮮やかな羽色、大きな嘴、胸、背、脚、どこもここも燃えているような緋色だ。そして樹間からさし込む射るような陽光を微妙に照り返し、周囲の濃緑と和して妖しいまでに輝いている。すばらしい美しさだ。

梅木先生は首から下げた七×三五ポロ型双眼鏡で、じーと見ておられる。やがて、「アカショウビンは水辺の鳥ですから、この近くにきっと池か流れかなにかがあるはずですよ」と静かにいわれた。「キョロロロ、、キョロロロ」アカショウビンが啼いた。初めは高く、二度目は低く啼いた。

やがて二班の人達が坂を下ってきたので私達一班のものは、おしいなという思いを残して交替し、八木先生の待っておられる場所に移動した。八木先生からは羊蹄山の成り立ち、岩石の観察、土壌と植生などについて講習を受け、ついで宗像先生から植物について講習を受ける場所に再度移動した。

その途中である。あったあった、大きな池が。さっきアカショウビンがとまっていたところから西方二〇〇mくらいの位置になろうか、山麓の泉からこんこんと湧き出る清水をたたえた大きな池である。深いところで一mくらいであろうか、池の水は緩やかに、極めて緩やかに流れている。流れているというより気づかない程度に動いているというような流れである。水の出口の方は浅くなって、草丈の低いヨシが茂っている。コウホネも咲いている。その先は湿地状になっていて、よくみるとモウセンゴケも植生している。

池全体を周囲から原生の広葉樹林が覆い被さり、池の中央部がわずかに開いていて真夏の太陽がそそぎ、薄暗い樹林の下を通ってきた私にはとても眩しかった。

さっきのアカショウビンはこの池を中心にして生活しているのである。住みよい、暮しよい環境の整ったところで……。それに

してもアカショウビンをみて「この付近に水辺があるはず」といわれた梅木先生の知識と研究心には驚きいるばかりであった。

鳥は環境が整わなければ住まない。それは生きてゆけないからだ。人間はどうなのだろうか、環境なんかどうでもよいのだろうか。私は昨年三月、日高門別町を終焉の地と定め移り住んだ。そして来年三月には三十余年の役人生活（農業改良普及員）を辞して余世を送る生活となるのである。しかし環境はどうであろうか、必ずしも住みよいといえるだろうか。地元を見るだけでも日高中央横断道路建設の問題、沙流川流域のところかまわぬ採石の問題、そして沙流川二カ所にダムを設け、その水を苫東開発の工業用水として使用してしまう問題、日高山脈の監視のうすい山からの貴重な高山植物の盗採、観賞石類の盗堀、太平洋にそそぐ各河川における鮭をはじめとする魚類の密漁乱獲等々である。

講習会が終って帰るバスの窓から、羊蹄山をながめながら三日間ではあるが、真剣に勉強した満足感にひたるとともに、これから余生を送るなどと呑気にしておられない使命感のようなものを、アカショウビンに教えられたことに気づきつつニセコ駅前で下車した。日ざしのとても強い午後だった。

（会員　日高門別町在住）

―自然を三六〇度からみれるように―

大原雅樹

講習会を思い返してみると、講師の青柳、金田、工藤先生の快活ながらもきびしさを感じさせる雰囲気と、八木、宗像、梅木先生のソフトな雰囲気とが浮かびます。僕自身の成果としては、自然への接し方が無限にあるという再認識、そしていままで自分が思っていた自然観察についての構想が大きく補強されたことである。

そこで、北海道における第一回の講習会に参加することができた一人として、他のかたにも参加をお勧めしたいと思い、差しでがましくも筆を進めることにした。

僕が自然観察に関心をもち始めたのは今年の春からである。昨年から造花のアルバイトをしていて花の名前の知識の必要があったことと、四月から小学校教諭の自宅待機の身になり、花の名前を知ることにより遠足の時にでも「遠足のスーパー・スター」になれるのではなかろうかという理由からである。なにせ自宅待機という無給で暇な身分にとっては、自然観察はうってつけであり、握り飯をもっては札幌近郊をうろつき、春の花々に感動してはせっせと名前を覚えたものである。

そのうちに、「花の名前ばかり覚えても、花の咲く仕組ぐらい知らなければ子供たちに笑われる」と、植物生理学をかじり、興味は土壌へと拡がっているときに講習会のことを知り、即座に申しこんだ訳である。

当日、ニセコ駅に着いたもののバスに置いていかれそうになり、慌ててのったバスの中で宗像先生に挨拶していただきながらもうまく挨拶もできず、これからの人間関係に不安を抱きながら会場へ向った。その不安は具体的な雨となり、雨ガッパを忘れた僕には不安この上ない講習会になった。

その日は、金田先生の班につき、森林の観察から始められた。木の名前にこだわらず、遠景で、近景で、頭の中に等高線を引き、高さの変化に注意するなど森の中に入るまでに時間を使った。入ってからも、岩盤までの土の厚さを調べたり（僕のところは四〇cm。あとでこの厚さが樹木の発育の重要な要素であることを具体的に知った）、その過程での土の変化、そこにいる虫への関心（とくに青柳先生が強調されていた生産、消費、環元のサイクルのうち、環元の重視）など、いままで森の中に入っても「花はどこか？」と下ばかりみていた僕には漸新な視点を提供していただけたものと感激したのである。

夜の講義に引きつづき、翌日の早朝から夕方までの実習で、一貫した「名前にこだわらない」、「採集しない」という原則などに賛同しながらも、地質までひろげた講習内容に、ますます嬉しさを覚えた。また、個人的にこの日は二つの出来事があった。一つは、梅木先生のおかげで大好きなカワセミの仲間のアカショウビンを見ることができたこと。僕は鳥が不得意で、眼鏡をはずして双眼鏡をのぞく間に鳥を見逃してしまうのだが、このときはじっくりみせてもらった。もう一つは、「自然の家」の近くにある人工池で、トンボの孵化と孵化に失敗したトンボに集まるアメンボウ。人工池の単純な生態系ということだが、その神秘性には感動させられた。

夜の講義に引きつづき（ちっとも寝た気がしなかった）三日目の早朝からの実習。最後は各自が一つのテーマをもち、観察会の演習であった。僕の結果はテーマを大きくとらえすぎて悲惨な結果になってしまったが、身近な自然のありのままの姿に気づくという良い教訓になった。

（会員　札幌市在住）